

Title	政治的神話の起源と構造：カッシーラー『国家の神話』第十八章の考察
Author(s)	齊藤, 伸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.2, 2013.1 : 9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4346
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

政治的神話の起源と構造

カッシーラー『国家の神話』第十八章の考察

齊藤 伸

1. はじめに：『国家の神話』という著作

カッシーラー最後の著作となった『国家の神話』(The Myth of the State)は、彼が急逝する数日まえによく脱稿されたばかりのものであった。この著作において彼はそれまでの『シンボル形式の哲学』や『認識問題』あるいは、他のルネサンス研究などとは一味違った論調で語っている。「エルンスト・カッシーラー」という人物の人柄を良く表したものに、カッシーラー夫人による回想録がある。そこではエルンストの師であったヘルマン・コーヘンとの対照的な姿が描かれている。それによると、或る日コーヘンは夫人に次のように語った。「〈奥さん御覧なさい。学派の中にはあらゆる気質が表れています。これがまさに私達マールブルク学派の素晴らしさなのです。気性の激しい青年から円熟した老人にいたるまでですね〉。コーヘンにはやりと笑い、こう結んだ。「その際、無論私が青年で、あなたのご主人は老人なのですよ」』と。ここでコーヘンは、自らは血気盛んな青年であり、彼より三十歳以上も歳下であるエルンストを「老人」と呼んでいる。夫人によれば、コーヘンがベルクソンや他の同時代の哲学者たちを痛烈に批判することをエルンストは幾度もたしなめたのであった。哲学者エルンスト・カッシーラーは、常に冷静沈着にして客観的、明晰な思考によって思索を展開する思想家であった²。そのゆえに若きカッシーラーは「老人」と形容されたが、そんな彼が三十年後に著した最後の著作が『国家の神話』である。当然のことながら、そこには彼独特の緻密な歴史考察が見られる。全三部から成るこの著作の第一部と第二部では、彼のこれまでの研究成果を踏襲しながら議論を展開し、思想史における「神話」の位置づけを行っている。本稿ではそれらの後に登場する第三部、その中でも最終章にあたる第十八章を問題としてみたい。そこでもカッシーラーは相変わらず「老人」として

語ろうとしているにもかかわらず、そこには怒りや悲しみ、さらには絶望といった「老人」らしからぬ感情の発露が感じられる。そこで彼は「政治的神話」の起源と構造を考察することによって、現代の私たちにもなお妥当する普遍的な政治現象を明らかにしようと試みる。したがって、そこには私たちが学ぶべきものを含まれており、それらは私たちが現代の政治に対してとるべき態度への手掛かりとなり得るであろう。

2. 「政治的神話」による「政治的思考」の転覆

政治的思考 『国家の神話』においてカッシーラーは、「政治的思考」(political thought)がいかなる変遷を経て当代の「政治的神話」(political myth)を生み出したかを明らかにしようとする。カッシーラーが言う「政治的思考」とは何か。すなわちそれは「政治」を創り出す思考形式であり、統治や社会の形態は様々であるとしても、国家を構築し、維持しようとする思考形式であると言える。それは、たとえばプラトンが「最善の国家」ではなく、「理想の国家」を論じたとしても、国家や社会を形成するための「健全な思考形式」であることには変わりはない。それはちょうど、「神話的思考」が「神話」を創り出す思考形式であることと同じ関係にある³。

政治的神話 次に彼が言う「政治的神話」とは、とりわけナチスがそれによってドイツの政権を掌握した手段、および当時のドイツを席卷していた雰囲気そのものを意味していると要約できる。それはカーライルの「英雄崇拜」や、ゴビノーの「人種崇拜」といった、単なるアカデミックな議論に終始したものではない。それは単なる空想的な絵空事でも、机上の空論でもなく、歴史的な現実となった。こうした意味においては、「ヘーゲルの国家学説——この〈地上に現存する神的理念〉という理論ほど、ファシズムと帝国主義とを準備するのに貢献したものはない」⁴とカッシーラーは

言う。ヘーゲルの学説は、その後彼自身の意図とは無関係に所謂「ヘーゲル右派」と「ヘーゲル左派」とを形成するようになる。しかしながらカッシーラーによれば、ヘーゲルの学説が結果としてファシズムに至る道を用意したとしても、そのかどでヘーゲル一人に責任を押し付けるわけにはいかない⁵。むしろ彼によれば、ここで決定的な役割を果たしたものは「政治的神話」であった。この命題こそ、彼が『国家的神話』において明らかにしようと試みるものに他ならず、そして第十八章「現代の政治神話の技術」において論証される内容である。そこでカッシーラーにとっての「神話」とは何かを簡単に述べた後に、それが政治的思考に対していかなる関係にあるのかを明らかにしたい。

神話の機能 未開の民族にとって、「神話」は自然を超克するための物理的な力として理解されている。それは祭儀や呪術として現れ、彼らの生活の全体を支配する原理となる。しかしながら、未開の民族は、決してルソーが想像したような自由奔放な自然のうちのみ生きているのではない⁶。つまり、彼らはまったく非合理的な思考のみを採用しているわけではない。彼らはむしろ先祖代々と受け継がれてきた因習のうち生きており、例えば彼らはまったく合理的な仕方に従って道具を作り、周到な準備をもって狩りを行うことができる。カッシーラーがここで採り上げて論拠としているように、人類学者プロニスワフ・マリノフスキはこうした行動を「きわめて経験的、すなわち科学的である」と叙述した。そのため彼らは自己の努力や智恵をもって対処することが可能な事柄に対しては、まったく神話を必要としない。神話が登場するのは、彼らにとって「絶望的な状況」においてである。「絶望的な状況においては、人間はつねに絶望的な手段 (desperate means) に訴える」⁷のである。土人にとっては神話もつ呪術的な力はまさにその「絶望的な手段」であった。

しかしながらこれは、決して未開の民族のみに妥当する思考様式ではない。カッシーラーによれば、「現代の人間は、もはや自然力の呪術を信じていないとしても、一種の〈社会的呪術〉にたいする信仰を決して放棄してはいない」⁸。そのため二十世紀に生じたファシズムという政治的神話は、二十世紀の人間にとっての「絶望的な手段」そのものであった。さらに、当時のドイツは第一次大戦の敗戦による多額の賠償による財政難、インフレや失業による社会・経済の制度全体の崩壊に瀕していた。カッシーラーによれば、「こうした状況こそ、政治的神話が育成し、そこに豊かな養分を見出しえた本来の土壌であった」⁹。すべての人間は常に神話の種子をもっているが、当時のドイツ人たちはそれが爆発的に成長し得るような土壌のうえに立っていた。そしてカッシーラーによるともう一つ、最後の契機が「政治的神話」を開花させ、結実させた。それは、カーライルやゴビノー、そしてヘーゲルが説いた国家・政治に関するアカデミックな思想を、実際に政治的武器へと変える「技術」であった。それゆえカッシーラーによれば、ナチスの政治家たちは、「魔術師」と「技師」というかつてない二つの矛盾しあった役割を果たしていたのである。この二十世紀に生じた「神話」は、もはやかつての豊かな内実をもった想像的主観性の所産ではない。それは計画によって創り出された「人工品」である。したがってカッシーラーは、ドイツが辿った道を次のように叙述する。「軍事的再軍備は、単に政治的神話によって引きおこされた精神的再軍備の必然的な結果に過ぎなかった」¹⁰と。こうして政治的思考は転覆し、いわば「政治神話的思考」となった。それはもはや「思考」というよりも、むしろ「崇拜」と呼ぶべきものへと変化したのである。この思考の転覆がもたらせた結果の悲惨さは、もはや多言を要しないであろう。

3. おわりに：カッシーラーから学ぶべきもの

『国家の神話』におけるカッシーラーの議論は、政治的神話としてのナチス（ファシズム）を批判する目的で書かれたものであるが、だからと言ってそれは特定の国家や政党のみに限定的に妥当するものではない。「老人」カッシーラーは、ここでもそれを人間における思考の機能的展開を弁証法的に叙述し、努めて客観的な手法によって明らかにしようと試みている。しかしながら、彼は最終章の終わりに、上述したような「絶望的な手段」としての政治的神話に対して哲学が成しうることがあるとすれば、それは「私たちに敵(adversary)を理解させ得ることである」¹¹と述べている。「老人」カッシーラーが特定の主義主張に対して、「敵」という言葉を用いていることに驚くが、それは彼が最大限に自己を抑えたとえでの言葉であったのであろう。そして彼は次のように締めくくっている。「われわれは同じ誤りを二度と繰り返してはならない。われわれは政治的神話の起源、構造、方法および技術を周到に研究しなければならない。われわれは敵と戦う方法を知るために、それを面と向かって見なければならぬ」¹²。彼のこの戒めは、ファシズムのみに向けられたものと解すべきではなく、むしろそれは時代を越えて私たち自身がそれぞれ政治に対して挑むべき課題を伝えている。

1 『ダヴォス討論（カッシーラー対ハイデガー）、カッシーラー夫人の回想抄』岩尾龍太郎・真知子訳、リキエスタの会、2001年、57-58頁。

2 さらに夫人はまったく素朴にコーヘンを次のように評している。「コーヘンという人間は、態度からして現代の哲学者というよりはむしろはるかに旧約時代の預言者タイプに属していた。コーヘンには、嵐のように激しい気質と共に、切迫して重要だと思われる事柄を——自分の意のままになる手段を尽くして——成し遂げさせたいという燃えるような願望とがあった。多くの点と同様にこの点でもコーヘンはエルンストと正反対であった」。前掲訳書、60頁。

3 カッシーラーが言うところの「神話的思考」に関しては拙著『カッシーラーのシンボル哲学』53頁以下を参照。

4 Cassirer, *The Myth of the State*, Yale University Press, 1946, p.273. (カッシーラー『国家の神話』宮田光雄訳、創文社、1982年、360頁)

5 ここでのカッシーラーの議論は、馬原潤二『エルンスト・カッシーラーの哲学と政治』風行社、2011年、130頁以下で詳細に検討されている。

6 ルソーは人間を「自由人」と「社会人」とに区別する。こうした区別は『エミール』や『人間不平等起源論』のなかに見られ、そこで彼は「悪」の起源がまったく人間的な経験に由来すると主張した。この議論については前掲拙著、206頁以下を参照。

7 Cassirer, op. cit., p. 279. (369頁)

8 Cassirer, op. cit., p. 281. (372頁)

9 Cassirer, op. cit., p. 278. (368頁)

10 Cassirer, op. cit., p. 282. (374頁)

11 Cassirer, op. cit., p. 296. (392頁)

12 Cassirer, op. cit., p. 296. (392頁)

(さいとう・しん 聖学院大学総合研究所特任研究員)